

# 人生とコーヒー・スプーン

東京大学教授 高橋和久

最近は無意識過剰の人間が多くなったようで、自分もその一員だろうが、それでも若いころには、人並みに過剰な自意識を持っていると思っていた、ような気がする。それどころか、自分の自意識は容易に他人に理解されるものではないと、それを大事に抱え込んでいたような気さえる。自分だけの特別なものと思ひ込んだ自意識を削り落とすこと、或いはそれが擦り切れることこそ成熟である、などという気はないし、また自分の経験を一般化するつもりもないが、いつからか始まった無意識過多への移行に呼応しているのかどうか、歳を取るにつれて食べものの好き嫌いがなくなってきた、より正確に言えば、食べられないものが減ってきたという事実は歴然としてあり、それが文学作品の味わい方に変化をもたらした気配もある。以前は苦痛だった作家や作品が読めるようになってきたわけだが、しかし幾許か剥離の感覚を伴って自覚されるのは、そうした嫌悪の減少に伴い、かつて好物を食べたときに得た感動を十分に追体験できなくなってきたのではないかということである。何でも食べられる人間が文学を語ろうとすれば、「悲しいことに、ぼくは次第にキンピラゴボウを食べられるようになった」とでも前置きしなくてはならないのかもしれない。

何かの本歌取りを気取っているらしいこの弁明でかつての文学体験を語る資格が得られたとすれば、思い出すべきは、本歌取りの名手 T. S. Eliot が自意識をドラマ化したと見える作品、“The Love Song of J. Alfred Prufrock” にならざるを得ない。もちろん「ぼくは自分の人生をコーヒー・スプーンで計り尽くしてしまった (I have measured out my life with coffee spoons)」という一行に遭遇したときには、Donne や Marvell がこの詩の下絵になっていることも、またこの詩人が精神の成熟の重要性を唱えてい

ることも知らなかった。ただ、life という茫漠とした抽象概念をコーヒー・スプーンという瑣末な具体で測定した(と背伸び混じりに言い切る、或いは言い切ってみせる)潔さに何がしか反応したことは間違いない。括弧内に奇妙な留保を付したのは、この断定の数行前に ‘Time for you and time for me, / And time yet for a hundred indecisions, / And for a hundred visions and revisions,’ や ‘In a minute there is time / For decisions and revisions which a minute will reverse.’ といった詩句が置かれているためである。この話者にはどうやら「何度も優柔不断にふける時間」と、何度も「展望／幻」を獲得しながら、すぐにそれを「見直す／修正する」習慣があるらしい。それどころか「決断」も「見直し」も「瞬時にして逆転」してしまう性質のもの。そんな人間の潔い断定(の身振り)にはおそらく気負いが付き纏う。

詩冒頭の「それじゃあ出かけよう、君とぼく (Let us go then, you and I)」こそ「恋唄」にふさわしく響くものの、以後の展開は恋唄というより恋への躊躇いを唄っているようであり、外への行動を決断する「ぼく」とそれを修正しようとする「君」(或いはその逆)との間で繰り広げられる内なる対話を描いていると読める。少なくとも、大学に入ったものの授業はなく、それじゃあデモに出かけよう、と決断／見直しをする優柔不断を習慣とするような多少の自意識を抱えた若者がそのように読んだとしても不思議ではない。そこにどれほど自己惑溺の契機が潜んでいたかは言わぬが花。何しろこの詩の結語が内なる対話者が一体となった「ぼくたちは溺れる (we drown)」なのだから、それならこの駄文の結びは、「精神の未成熟を仮面にして、昔話を垂れ流してしまったぜえ、チャイルドだろお」とするしかないか。この本歌取りは間が抜けていて、よい。